

災害時の「やさしい日本語」を 教室教材として使用する方法を探る ～ラジオ放送用災害時音声素材を中心に～

Searching for methods of using “Easy Japanese”
from times of disaster as classroom materials
—Focusing on audio materials from disaster radio broadcasts—

荒瀬 雅子
ARASE Masako

キーワード

〔やさしい日本語〕 Easy Japanese

〔日本語能力試験〕 Japanese Language Proficiency Test

〔災害〕 Disaster

〔語彙〕 Vocabulary

〔理解度〕 Understanding

I. はじめに

日本語教師という立場で携わってきた教育現場では、災害時に必要な語彙や具体的な指導が、ほとんど日本語学習者に対しておこなわれていない現状があったこともあり、日本語を母語としない滞日外国人に対する政策を調べるうちに、「やさしい日本語」の存在を知った。非常に有効であると感じ、日本語教育現場に積極的に取り入れるべきだと考えた。

そのためにも、「やさしい日本語」がどのように活用されているか、減災教育の必要性を含め、具体的にどのような語彙を教える必要があるのかを考え、論じることとする。また本稿での1級2級3級4級は、日本語能力試験の旧1級、旧2級、旧3級、旧4級を指す。

II. 災害時の非日本語母語話者への情報提供に関する問題と対策

阪神大震災が起こったときの非日本語母語話者の状況であるが、「ことばの壁で避難先などの救援情報をスムーズに入手できず、不安に駆り立てられて『緊急帰国』する外国人留学生や出稼ぎの外国人が相次いでいる」と、朝日新聞大阪版（1995年1月23日）で報道された。

このような状況が引き起こされた要因は、日本語母語話者に対して行う情報提供と非日本語母語話者に対する情報提供とを、分けておこなう必要性がこれまで認識されることもなく、情

報弱者が生まれるという予測がされていなかったことにあると考えられる。

これに関して佐藤（1999, p.33）は次の対策がとられたと述べている。

「災害時の日本語」研究グループ⁽¹⁾は、情報被災者をできるだけ減らすための言語的対策への回答として、『災害時に使う外国人のための日本語案文－ラジオや掲示物などに使うやさしい日本語表現』⁽²⁾（1999, 5）を刊行した。

Ⅲ. 「やさしい日本語」と「災害語彙」についての先行研究のまとめ

1. 「やさしい日本語」の有効性

松田（1999）によると、多くの外国人が知っている可能性の高い、日常的な話し言葉を用いて、理解を容易にし、必要な情報を伝えるために、構文・音声情報の読み方・語彙などの方策を、総合的に提示するものであると述べている。

松田・前田・佐藤（2000）では、「やさしい日本語」表現を用いた案文の理解率検証のための聴解実験がおこなわれ、やさしい日本語（外国人のための日本語案文）でのニュースの理解度は、通常のニュースよりも、大幅に高くなることが確認されたと述べられている。

さらに、「災害時の日本語」研究グループは、「減災のための「やさしい日本語」研究会」⁽³⁾と名を変え、留学生および日本語を母語とする小学生（低学年）を被験者とし公開実験を行っている。馬場・米田（2007）によると、「やさしい日本語」は留学生だけでなく、日本語習得度の低いネイティブスピーカーにとっても有効な情報伝達手段になることを示唆しているとしている。

2. 災害語彙リスト

2-1. 被災した小学生の作文をもとにした語彙リスト

佐藤（2009）によると、災害が起きたときに必要となる語にはどのようなものがあるか、災害語彙の重要語リストが作成されており、日本語初級レベルの外国人が知らないと思われる1、2級及び級外の語の中から、地震を経験した日本人小学生作文から使用頻度の高い語が選出されている。ここで作成された災害重要語彙リスト100語及び災害語彙リスト211語⁽⁴⁾を本稿の災害語彙リストの参考データとする。

2-2. 「やさしい日本語」広報文の語彙

日本人を対象に行われる情報提供のために、あらかじめ作成されている資料「地震時の緊急コメント」⁽⁵⁾をもとに、減災のための「やさしい日本語」研究会が「やさしい日本語」版を作成している（水野他2009）。この資料を用い、前田・鹿嶋（2009）は、広報文の語彙に焦点をあて、どのように語彙が置き換えられたかなど方法が述べられているが、特にやさしい日本語に置き換えられていない級外・1級・2級の語彙を災害語彙の参考データとして使用する。

2-3. 「生活者としての外国人」に対する日本語教育

文化庁文化審議会国語分科会日本語教育小委員会の作成した「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案⁽⁶⁾ (2010) のうち、来日間もないかどうかを問わず、安全にかかわり緊急性があるため、情報として知っておく必要があると考えられる「災害に備え対応する」で提示されている事例 (0501 ～ 0503) で用いられている語彙を本稿では、参考データとして使用することとする。

2-4. 災害時ラジオ放送用「やさしい日本語」音声素材

多言語放送がおこなわれている「FMわいわい」内には、AMARC日本協議会⁽⁷⁾ (以下AMARC) の事務局が設置されており、地震、津波、洪水、地滑りが発生したとき、またはそれに備えるための情報を、在日外国人や高齢者、子どもたちにわかりやすく伝えるために、「やさしい日本語」で収録された191のラジオ放送用災害時音声素材⁽⁸⁾ を作成、公開している。本稿では、この音声素材を中心に「災害語彙」を考えていくこととする。

AMARCが作成した191すべての音声素材を文字化したものをKH Coderを使用し、品詞別に語彙の抽出 (総抽出語数6062語、全異なり語数675語) をおこなった。ここで抽出されたものを災害語彙の参考データとして使用する。KH Coder⁽⁹⁾ で抽出した語彙をReading Tutor⁽¹⁰⁾ を使用し、さらに日本語能力試験のレベル別にわけ、出現語彙と出現語彙の語彙レベルの割合をまとめた。表1に示す。

表1 AMARCラジオ放送用災害時音声素材 級別出現語彙

名詞					
語彙総数	級外	1 級	2 級	3 級	4 級
141	34	14	49	17	27
100.00%	24.10%	9.90%	34.80%	12.10%	19.10%
	地滑り 震度 鉄砲水 ひび割れ 地割れ :	洪水 災害 津波 ストレス 行政 :	地域 電気 地面 知らせ 被害 :	場所 地震 ガス ガラス 水道 :	建物 家族 ラジオ 飲み物 天気 :
サ変名詞					
語彙総数	級外	1 級	2 級	3 級	4 級
61	11	9	25	12	4
100.00%	18.00%	14.80%	41.00%	19.70%	6.60%
	山崩れ 在留 警報 :	避難 下痢 救援 :	手続き 証明 停電 :	注意 用意 準備 :	病気 電話 一緒 :

ここでも級外の語彙 (震度、警報など)、1 級の語彙 (避難、救援など)、2 級の語彙 (停電、被害など) が多く使用されていることがわかる。AMARCが作成した音声素材では、名詞に限っては半数以上が2 級以上の語彙となっており、情報を発信しているラジオ局においては、「やさしい日本語」という括りであっても、置き換えを多用せずに災害時に必須の語彙に関し

ては使用しているというのが現状であると言えるのではないか。

Ⅳ. 日本語学習者の語彙の理解度

Ⅲで述べたとおり、「やさしい日本語」での放送や広報文の作成を目指すとしながらも、現状では2級以上の語彙が多く使用されていることがわかった。これらの結果から、「やさしい日本語」に置き換えられずそのまま用いられている2級以上の語彙は、災害語彙として学んでいく必要があると考え、本章では、日本語能力上級レベル（1級）の学習者が、どの程度理解しているのかを明らかにすることを目的とし、調査をおこなうこととする。

1. 語彙の選定基準

語彙の理解度調査をおこなうにあたり、100語を選定した。

まず、Ⅲで挙げた4つの資料、つまりAMARC災害時放送用音声素材、前田他（2009）の広報文の語彙、佐藤（2009）が作成した災害重要語彙リスト、日本語教育小委員会（2010）の事例の中で使用されている全名詞語彙リストを作成し、次に、出現語彙を日本語能力試験（JLPT）の級別にまとめた。

主に級外、1級の語彙を中心としたが、災害語彙として関わりの少ないと判断した語彙（級外：ムカデ 1級：金槌など）は削除した。

反対に、2級の語彙ではあるが、特に災害語彙として重要であると考えられる20語（被害、情報、停電、指示など）を取り上げた。

なお、動詞については、表2に見られるように、3級と4級の語彙が70%以上占めている。級外と1級で多少の違いはあるものの、語彙レベルがあがるにつれ、使用される語彙が少なくなる点から、本稿では扱わないこととした。

表2 AMARC音声素材 出現語彙【動詞】級別の割合

語彙総数	級外	1級	2級	3級	4級
152語	7語	6語	32語	49語	58語
100.00%	4.60%	3.90%	21.10%	32.20%	38.20%

2. 調査の概要

- (1) 調査の目的は、日本語レベル上級者が災害に関する語彙をどの程度理解しているのか、音声・文字それぞれによる語彙の理解度を測るものである。
- (2) 調査協力者は調査時に関西学院大学に在籍していた学部留学生25名。
それぞれの国別の人数は以下の通り。
中国人22名（ウイグル自治区1名含む）、台湾人1名、韓国人2名
なお、調査協力者の日本語レベルはJLPT 1級以上の上級者である。
- (3) 日時および実施場所は、2010年9月24日、関西学院大学内教室にて50分でおこなった。

(4) 調査方法は、次の通りである。

①音声による語彙の理解度調査

語彙を1語につき連続して2回読み上げたもの(所要時間5秒を目安とする)100語を調査協力者が聴き、調査シートの「よくわかる」「聞いたことはあるがよくわからない」「わからない」の該当する箇所には○を記入する。

②文字による語彙の理解度調査

調査協力者が調査シートに書かれている語彙100語をみて、「よくわかる」「見たことはあるがよくわからない」「わからない」の該当する箇所には○を記入する。

調査協力者25名全員同時に、まず音声による調査をおこない、調査シート回収後、次に文字による調査の順でおこなった。読み上げに使用した語彙は、文字による調査で使用した語彙と同一である。ただし、2語重複(震度、ボランティア)があったため調査時に欠番とし、調査に用いた語彙は98語となった。

3. 調査の結果と分析

3-1. 音声と文字による理解度比較

図1の図中に示されているA・B・C・D-1・D-2の区分けは、以下に準じておこなっているものである。

A = 文字での理解度が50%以下であり、音声での理解度が50%以上である。

B = 文字・音声の理解度が、いずれも50%以下である。

C = 文字での理解度が50%以上であり、音声での理解度が50%以下である。

D-1 = 音声での理解度が50%以上75%以下、あるいは文字での理解度が50%以上75%以下である。

D-2 = 文字・音声の理解度が、いずれも75%以上である。

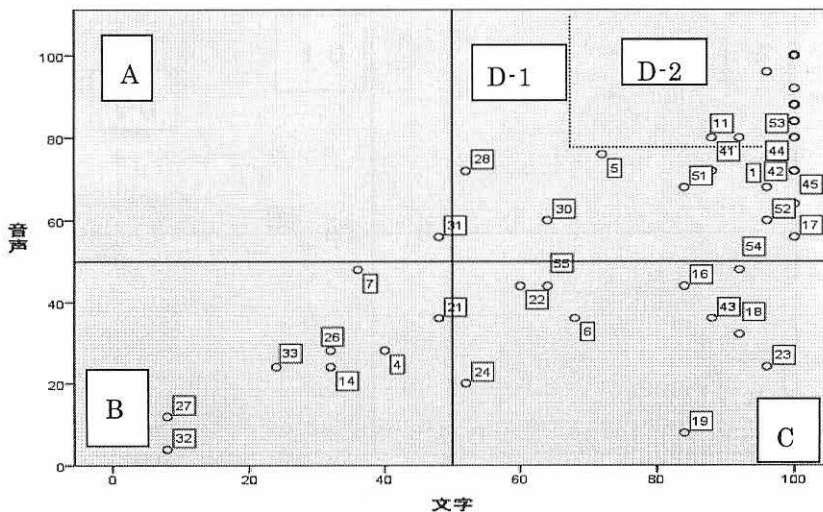


図1 文字・音声による語彙の理解度 散布図 級外53語

図1（級外）に見られる理解度の特徴は、次のとおりである。

（1）文字と音声の理解度が共に50%以下の語彙＝B

8語中7語がカタカナ語である。気象に関する語彙「32モンスーン」や被害に関わる「26アスベスト」など、専門知識に関する語彙の理解度が低く、また「7クッション」「33リュック」「4プレーカー」など日常おそらく目にしているだろうと思われる語彙が、意外にも理解度が低い。カタカナ語の物の名前と現物が結びつかない（結びつきにくい）ことがわかる。

（2）文字による理解度が50%以上、音声による理解度が50%以下の語彙＝C

「19地滑り」「22ひび割れ」「23地割れ」「24がけ崩れ」など災害が起こったときの現象（状態）に関する語彙が多く見られる。Bに含まれるがCに近い理解度であった「21鉄砲水」も同じく災害の状態といえるだろう。「16下敷き」についても災害の状態による被害として捉えらるゝと、災害の現象の下位項目として挙げられるのではないか。他にも、災害を知らせる手段として発生時に使われる「54発令」、また災害発生後の避難所などで使用される「18広報」も音声による理解度は低くなっている。

このように、災害の状態に直結している語彙や、知らせるための手段である語彙が音声による理解度では低いという結果が見られた。この結果は、災害や被害の状況が理解できないこと、日本語能力レベル上級者であっても情報弱者になりうることがわかった。

図2（1級語彙）の理解度が低い語彙は、「56おむつ」「66ロープ」である。「おむつ」を、「わかる」と回答した人がほぼ半数（音声48%、文字52%）という結果が出ている。今回の調査対象者の属性が学生であり、身近なものでは無いため、音声での認識が難しかったと考えられる。また、文字でもひらがな表記であるため、手掛かりがつかめなかったのだろう。「ロープ」の意味を「わかる」と回答した人が、音声では48%と、半数以下であった（文字は60%）。「聞いたことはあるがわからない」が4人、「わからない」が9人となっているが、カタカナ語は特に耳に残りにくく、実物を見なければ、音が一致しにくいなども原因のひとつにあるのか

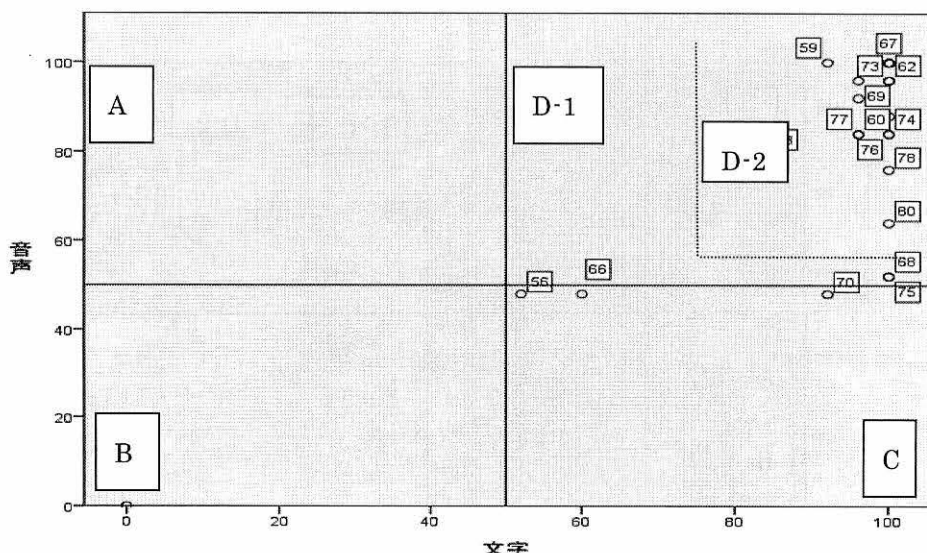


図2 文字・音声による語彙の理解度 散布図 1級25語

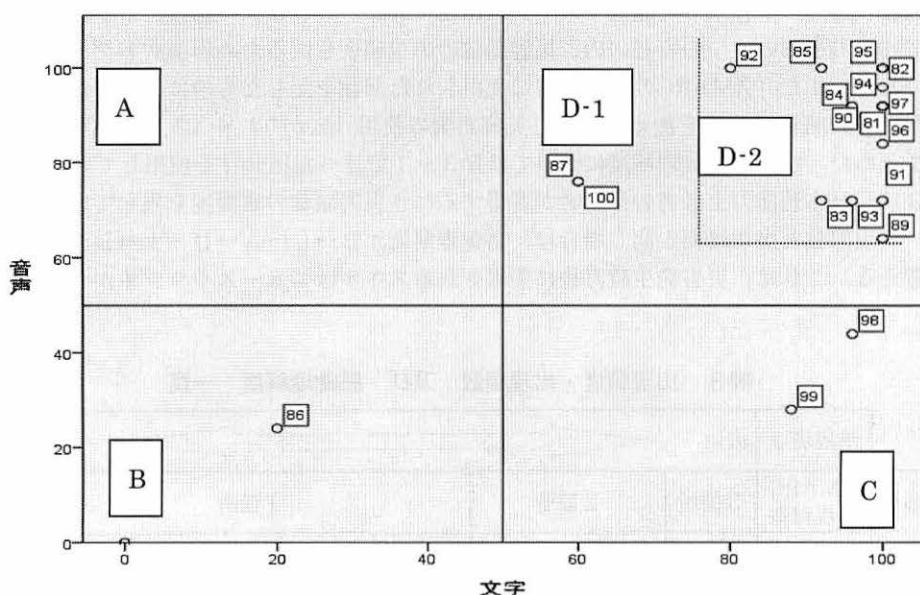


図3 文字・音声による理解度 散布図 2級20語

もしれない。

音声では、52%と半数ほどの理解率であった「68行政」「75勧誘」が、文字ではいずれも100%となっている。大学の授業や学校生活で耳にする機会が少なからずあると思われる。使用語彙として身につけていなくても、理解語彙としては音声であっても、もう少し理解度が高いと考えていたため予想外の結果となった。理由として考えられるのは、日本語学習者にとって、長音の聞き取り（聞き分け）は難しいとされており、「行政」「勧誘」は長音を含む語彙であるということ、また、今回の調査者は中国語圏の学習者が多く、日本語と中国語の「行政」「勧誘」の文字表記および語彙の意味は、全く同じであるのに対し、音声は異なるため、全く違う語として理解してしまうという2点が挙げられるのではないかと。

図3（2級語彙）のうち、文字・音声いずれの場合も理解度が低い（音声24%、文字20%）のは「86サイレン」であった。2級語彙であり、必ず「救急車」や「消防車」の「サイレン」を一度は聞いたことがあると言える語彙が、ここまで低い理由は、何故なのだろうか。日本語では注意を知らせるツールに「サイレン」や「警報器」があり、共に語彙として使用する。漢字圏の学習者にとっては、「警報器」であれば中国語の「警报声（＝サイレン）」と似ていることから意味が理解しやすいと思われるが、カタカナでは文字でも音声でもイメージが出来ないからではないか。

V. 教室教材としての災害語彙

1. 災害語彙の使用状況と使用頻度および理解度

調査で使った災害語彙98語の使用の広がりを見るため、AMARCの災害時放送用音声素

材、佐藤（2009）が作成した語彙リスト、前田他（2009）の広報文の語彙、日本語教育小委員会（2010）の事例の4つの資料の内、災害語彙の出現頻度を図るため何箇所かのデータで使われているか、また、AMARCの音声素材に使用された回数を記したものに、今回対象とした日本語学習者の語彙理解度を加えたもの「災害語彙の使用（広がり）＋（多さ）×理解度」を表3にまとめた。なお、語彙理解度についてはⅣ3－1で述べた区分けを使用している。

表3は、日本語能力上級者の学習者が習得するべき災害語彙の重要度を表していると考えられる。出現回数と出現場面が同じ場合は、語彙理解度がB→C→A→D－1→D－2の順に重要と考える。これは、災害発生時直後に要求されるスキルはニュースやラジオからの音声を理

表3 出現頻度・出現回数 及び 語彙理解度 一覧

出現場面		広い 狭い			語彙理解度
出現頻度	AMARC出現回数	3箇所	2箇所	1箇所	
多い 少ない	23	避難			D－2
	22			洪水	D－2
	16		地滑り		C
	10	災害			D－2
	7		震度		D－2
	6		山崩れ		D－2
	5			鉄砲水	B
			被害		D－2
	4	津波	お知らせ・情報		D－2
	3		ブレーカー		B
			ひび割れ・地割れ		C
			薬	予報	D－2
	2		がけ崩れ・瓦		C
			毛布・恐怖		D－1
			ボランティア・無事・被災	在留・入国・ストレス・住宅	D－2
	1		ヘルメット		A
			サイレン	アスベスト・デマ・モンスーン・リュック	B
				防塵・発令・罹災・ロープ・土台	C
			仮設・ローソク・停電	ヒビ・ブロック・長靴・伝言板・領事館・感電・行政・勧誘・点検・症状	D－1
		揺れ	ビル・救援	救急・傾き・使い方・傷み・水害・注意報・泥水・警報・メッセージ・印鑑・助け・保険・下痢・確保・固定・再生・施設・コンセント・斜め・噂・爆発・指示	D－2
	0			クッション・マグニチュード	B
			元栓	下敷き・広報・おむつ・破片	C
			グラウンド	キー・プロパンガス・給水・消火器	D－1
			救急車・消防車	余震・体育館・懐中・大震災・生理用品・ティッシュ・暴風・煙	D－2

解することが優先されるという判断に基づいている。

2. 災害語彙教育における留意点

前項では災害語彙を重要度の観点から述べてきたが、災害語彙98語を日本語レベル上級の学習者に教える場合、どのような点に留意して教えていくのか、Ⅳでも述べたように、理解の低さが問題と考えられるカタカナ語を重点に考える。では、どのようにカタカナ語を教えていくかだが、それぞれの語彙がどのように用いられるかを、カテゴリーに分けてみることにした(表4)。分け方は分類語彙表(国立国語研究所編2004)を基準に行っており、部門、中項目、分類項目の見出しも、分類語彙表に沿ったものである。

表4 分類語彙表によるカタカナ語のカテゴリー化

部 門	中項目	分類項目	語 彙
抽象的関係	形	穴・口	ヒビ
	量	角度など	マグニチュード
人間活動の主体	成員	サービス	ボランティア
	心	心	ストレス
人間活動－精神および行為	言語	合図・挨拶	サイレン
		通信	メッセージ
		評判	デマ
生産物および用具	資材	紙	ティッシュ
		木・石・金	ブロック
		燃料・肥料	プロパンガス
		コード・縄・網など	ロープ
	衣料	帽子・マスクなど	ヘルメット
		寝具	クッション
	住居	家屋・建物	ビル
	道具	袋・かばんなど	リュック
		日用品	キー
	機械	灯火	ローソク
		電気器具・部品	コンセント ブレーカー
	土地利用	地類	グラウンド
自然物および自然現象	物質	鉱物	アスベスト
		風	モンスーン

具体的に文字および音声による理解が特に低かった語彙(文字、音声ともに理解度が50%以下であったもの)の導入方法として、次のようなアプローチが考えられる。「生産物および用具」に区分される「ブレーカー」「クッション」「リュック」などは、レアリア(実物)や写真

などが手に入りやすく、また、学習者の目に日常的に触れるものであるため、語彙の意味理解は、容易であろう。反対に、「自然物および自然現象」に区分される「アスベスト」「モンスーン」「抽象的関係」の「マグニチュード」、「人間活動－精神および行為」の「サイレン」「デマ」などの語彙の導入については、関連語彙、特にカタカナ語ではない、理解度の高い語彙と併せて提示していく必要があると考える。

Ⅵ. 日本語学習者の災害に関する意識

1. アンケート調査

調査協力者22名を5つのグループに分け、以下の質問をおこなった。

質問 地震が起こったら①まず何をしますか。②地震情報を何で確認しますか。③どこに避難しますか。④（避難するとき）何を持って行きますか。の4項目である。

2. アンケート調査の結果

表5 グループワークの結果

	①最初の行動	②情報の確認	③避難場所	④持ち物
グループ1	友達に電話 じっとする ドアをあける	テレビ パソコン	広場	水 長期保存可能な食べ物 通帳・パスポート
グループ2	ドアを開ける ガスを閉める 電気を消す 通帳を確保 机の下にもぐる 遺書を書く	ラジオ	小学校 近くの体育館	水 懐中電灯 お金
グループ3	隠れるところを探す 電源やガスを消す ドアをあける	携帯 ラジオ テレビ	窓から遠いところ 面積が小さいスペース 公園・広場 指定された避難場所	水 懐中電灯 厚い服 マッチ
グループ4	安全なところ トイレ 机の下	ラジオ テレビ 携帯	避難所 公園など広い所	水 ライト ラジオ クレジットカード 外国人登録証 パスポート
グループ5	落ち着いて外に出る 準備をする ガスを閉める コンセントを抜く	ラジオ	建物のないところ 近くの体育館	水 懐中電灯 ラジオ 身分証明書 食べ物

グループごとに意見をまとめ発表された回答は表5のとおりである。

それぞれの回答を見ると、対処方法がわからないなどの回答はなく、適切な判断や行動がとられると予測され、災害に関する意識は高いと言えるだろう。

ただし、情報の確認をラジオでおこなうとしながらも、ラジオを所有しているとは限らないようであった。

自宅エリアの避難所を知っているか否かの質問に対し、アンケートの結果は、25名中、5名のみが知っていると回答した。グループワークでは、どこに避難するか質問に2つのグループが避難所をあげているが、実際には自宅エリアの避難所を知っているのは20%にとどまっていることがわかった。

今までに災害についての既習歴（授業で学んだことがあるか）の質問では、25名中8名（32%）のみが有りとし、災害について学ぶ機会は少ない。なお、内訳は8名中6名が日本語学校、2名が大学の基礎ゼミという回答であった。

災害に関して学ぶ機会の少ない学習者は、学ぶ必要性を感じているのだろうか。アンケート結果では、25名中24名が必要であると答えている。主な理由は次のとおりである。

日本は地震が多い国だから	8名
身を守るため（安全のため）	6名
役に立つから（困らないため）	4名
地震はいつ起こるかわからないから	3名

なお、必要性がないと回答した学習者の理由は、「災害を受けたことがないから」としていた。

3. 災害について学びたい内容とは

グループワークをおこなった後、市販されている避難グッズに収容されている（万能ひも、軍手、簡易トイレ、非常食、飲料水など）14点の紹介をした。

これらは最小限の避難グッズであるため、補充品の参考例が30品目紹介しているチラシも同梱されており、補充品リスト（折りたたみ傘、サバイバルシート（アルミ箔）、常備薬、ロープなど）も併せて紹介した。参考例一覧から、「アルミ箔」「ロープ」の意味がわからないという質問があった。「ロープ」に関しては語彙の理解度調査からも半数程度の理解率である結果が出ているが、やはりカタカナ語の「アルミ箔」も難しいようである。また、地震を経験した学習者は2名であり、地震を知らない多くの学習者にどのようなものであるのかを知ってもらうため、阪神・淡路大震災当時の町の様子を現した「震災追体験 1.17ダイジェスト版⁽¹¹⁾」の映像を視聴してもらった。

避難グッズの紹介と、震災の映像をみた感想、他に学びたいことなどを自由にアンケートに記述してもらったところ以下のような回答があった。主だった回答を示しておく。避難袋については、「準備するものがわかってよかった」と8名の回答が得られた。震災の映像は、「見てよかった」「地震の経験がないので怖かった」などがあった。

他に学びたいことは、「自分の住んでいるところやよく行くところの避難場所が知りたい」「どういうふうに避難するか」などの避難方法や、「地震が発生した時、何をすればよいのか」「災害にあったらどうすればよいのか」などの対処方法が複数あげられていた。また、「災害を

予防する具体的な措置」や「災害に関する言葉」など防災知識を学びたいという意見、「災害復興について」など、災害に関して広い範囲で学びたいという回答もあった。

4. 減災教育の必要性

前項で述べたとおり、アンケートの回答より災害に関する知識が必要と考える学習者が多いことがわかった。

自治体でも防災意識の活発化がみられ、さまざまな自治体で非日本語母語話者向けの対策や対応がとられている。

ひとつ例をあげると、京都府国際センターでは、外国人のための生活情報として、京都府内の防災ガイド『外国人のための防災ガイドブック⁽¹²⁾』を作成し冊子を無料配布（ダウンロード可）している。「やさしい日本語」版および、英語、中国語、韓国・朝鮮語、スペイン語、ポルトガル語、フィリピン語の6ヶ国語版に翻訳されており、絵入りでわかりやすく説明されている。

内容は、災害が起こったら取るべき行動や、非常持出品の紹介があるだけでなく、震度階級表や「災害のときの日本語」も説明されている。

「やさしい日本語」を用いたハンドブックやホームページでの避難所案内など、さまざまなツールが作成されている。しかし、アンケート調査からもわかるようにその存在をしらない学習者が多い。いつ起こるかわからない災害に不安を抱える学習者に少なくとも、積極的にツールの紹介をするなど、日本語教育現場でも減災教育に力を入れる必要性があると考ええる。

VII. 今後の課題

本稿では、まず、本研究の背景である阪神淡路大震災時の非日本語母語話者への情報提供の問題点、その問題点の対策として考え出された「やさしい日本語」および有効性について先行研究をもとに記した。

次に、災害語彙の選択を「やさしい日本語」に関する4つの資料からおこない、それらの語彙が日本語能力上級の学習者に理解されているか、どの程度理解不足であるのかを述べてきた。

しかし、日本語学習者の日本語レベルは様々であり、たとえ、同じ日本語能力上級の学習者であっても非漢字圏の学習者であれば、また違った結果であったとも考えられる。学習者の日本語レベルに応じて、語彙レベルが3級、4級のものも、災害重要語彙として取り上げる必要があるであろう。

具体的に、日本語能力レベルに応じて、効率よく災害語彙を導入していく点に関しては、今後の課題である。

注

- (1) 「災害時の日本語」研究グループ。弘前大学・国立国語研究所・大阪大学・神戸商科大学所属の日本語関係教官が中心になって運営されてきた会。メンバーは次の通り（五十音順）。井上文子、江川 清、姜 錫祐、佐藤和之、真田信治、杉原 達、陳 於華、ナカ

ミズ・エレン、前田理佳子、松田陽子、水野義道、宮島達夫、米田正人、ロング・ダニエル。

- (2) 『災害時に使う外国人のための日本語案文ーラジオや掲示物などに使うやさしい日本語表現』「災害時の日本語」研究グループがやさしい日本語表現マニュアルとして作成したもの。
- (3) 減災のための「やさしい日本語」研究会。日本学術振興会科学研究費による研究に携わる研究者および研究協力者 研究代表者 佐藤和之（弘前大学）他、2004年～2007年度に、減災のための「やさしい日本語」研究会に所属した者で構成されている。
- (4) 佐藤和之（2009）『外国人被災者のための地震災害基礎語彙シソーラス試案』『「やさしい日本語」の構造』表1 災害重要語彙リスト（100語）p.61 付表1 災害語彙リスト（211語）p.63
- (5) 「地震時の緊急コメント」http://www.hiroi.iii.u-tokyo.ac.jp/index-katudo-kyodo.kenkyu-saigai_hoso-shoki_comment_honbun02.htm（2015年1月20日アクセス）
- (6) 文化庁文化審議会国語分科会日本語教育小委員会（2010）「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/bunkasingi/nihongo_28/pdf/shiryo2.pdf（2015年1月20日アクセス）
- (7) AMARC日本協議会とは、世界各地の5000以上のコミュニティラジオ局が連帯し、国際的な協力のもとにコミュニティと市民参加型ラジオの発展に寄与する活動をしていく国際NGO「世界コミュニティ放送連盟」（英語名：World Association of Community Radio Broadcasters、略称：AMARC）の日本国内における作業グループとして国際的な協力のもと、コミュニティが所有、運営し、コミュニティの住民が参加する非営利型コミュニティラジオの発展に寄与していくことを目的とした団体。
- (8) ラジオ放送用災害時音声素材
<http://www.tccl17.org/amarcjp/easy-japanese/>（2015年1月20日アクセス）
- (9) KH-Coder 内容分析（計量テキスト分析）もしくはテキストマイニングを実現するために樋口耕一氏により製作された。広く調査研究に資するためフリー・ソフトウェアとして公開されている。
<http://khc.sourceforge.net/>（2015年1月20日アクセス）
- (10) Reading Tutor 日本語学習者のための日本語学習支援システムとして川村よし子氏、北村達也氏により開発された。辞書ツールや日本語能力試験を基準にして単語の難易度を判定する語彙チェッカーなどの機能がある。
<http://language.tiu.ac.jp/>（2015年1月20日アクセス）
- (11) 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター
地震破壊のすさまじさを映像と音響で体感するために作成されたもの
<http://www.dr.ne.jp/kanran/hito/digest.html>（2015年1月20日アクセス）
- (12) 『外国人のための防災ガイドブック』財団法人京都府国際センター
http://www.kpic.or.jp/f_nationality/consul_life_03.html（2015年1月20日アクセス）

参考文献

- 佐藤和之（1999）「震災時に外国人にも伝えるべき情報」『月刊言語』Vol.28-8 pp.32-41
- 佐藤和之（2007）「被災地の72時間－外国人への災害情報を「やさしい日本語」で伝える理由」
『「やさしい日本語」が外国人の命を救う－情報弱者への情報提供の在り方を考える－』『やさしい日本語』研究会 pp.9-27
- 佐藤和之（2009）「外国人被災者のための地震災害基礎語彙シソーラス試案」『「やさしい日本語」の構造』pp.53-63 弘前大学人文学部社会言語学研究室
- 真田信治（1996）「緊急時言語対策の研究について」『月刊言語』Vol.25-1 pp.94-99
- 杉原達（1996）「阪神大震災と多言語放送」『月刊言語』Vol.25-8 pp.88-93
- 弘前大学人文学部社会言語学研究室（2006）『「やさしい日本語」の有効性と安全性 検証実験 解説書 みんなで減災 2005 inひろさき～災害情報を「やさしい日本語」で～』
- 弘前大学人文学部社会言語学研究室（2009）『「やさしい日本語」の構造』
- 馬場康雄・米田正人（2007）「実験の結果と検証」『「やさしい日本語」が外国人の命を救う－情報弱者への情報提供の在り方を考える－』『やさしい日本語』研究会 pp.87-99
- 分類語彙表（2004）国立国語研究所編
- 前田理佳子・御園生保子（2007）「「簡易日本語能力テスト」について」『「やさしい日本語」が外国人の命を救う－情報弱者への情報提供の在り方を考える－』『やさしい日本語』研究会 pp.65-68
- 前田理佳子・鹿嶋彰（2009）『「やさしい日本語」広報文の語彙』『「やさしい日本語」の構造』pp.41-51 弘前大学人文学部社会言語学研究室
- 松田陽子（1997）「非常時の対応のための日本語教育」『日本語教育』92号 p.13-24
- 松田陽子（1999）「外国人のための災害時の日本語」『月刊言語』Vol.28-8 pp.42-51
- 松田陽子・前田理佳子・佐藤和之（2000）「災害時の外国人に対する情報提供のための日本語表現とその有効性に関する試論」『日本語科学』7 pp.145-159
- 水野義道・御園生保子・前田理佳子・鹿嶋彰・伊藤彰則（2009）「「やんしす」作成の経緯と「地震時の緊急コメント」『「やさしい日本語」の構造』pp.3-16